

# SOCCER BOOK

蹴球都市 100 年の歴史  
そして次の 100 年へ



藤枝市  
Fujieda City

第1章

蹴都誕生 ～初代校長の決断～ ..... P 1

第2章

近代サッカーの誕生..... P 3

第3章

ベルリンの奇跡..... P 5

第4章

2 人目の“伝道者”①② ..... P 7

第5章

メキシコシティオリンピック 銅メダル..... P11

第6章

フランスワールドカップ..... P13

第7章

長谷部誠物語..... P15

第8章女子サッカー<sup>ほうが</sup>萌芽、藤枝MYFC誕生からJの舞台へ … P17第9章

未来の藤枝サッカー..... P20



# 第1章

## 蹴都誕生 ～初代校長の決断～

1924年（大正13年）4月7日、藤枝町の千南原<sup>せんなんばら</sup>に新しくできた志太中学校（現藤枝東高校）で、錦織兵三郎（にしごり・ひょうざぶろう）校長が次のように呼びかけました。

「学生の運動につきましては、主にフットボール、日本語で蹴球<sup>しゅうきゅう</sup>を行わせることといたします！」

フットボール、蹴球……。ほとんどの人にとって、初めて耳にする競技を校技としたのでした。



錦織兵三郎校長

元々、志太地域に中学校はなく、自分たちのまちに中学校を招致<sup>しょうち</sup>することは、藤枝の人々の悲願<sup>ひがん</sup>でした。周辺地域の町村長たちは一丸となって県知事に請願書<sup>せいがんしょ</sup>を出すなどし、1922年（大正11年）、念願かなって藤枝宿の裏手にある千南原に中学を新設することが決定しました。

そんな町村の期待を一身に背負い新設された学校の入学式で、錦織校長先生は、校技をサッカーと宣言したのです。

入学した男子学生やその父兄、地域の有力者たちは大変驚きました。

当時の花形スポーツ<sup>はながた</sup>といえば野球で、学生野球は大変な人気<sup>はく</sup>を博しており、全国中等学校優勝野球大会、今の夏の甲子園大会に出場すると、その栄光とともに学校の名が全国に知れ渡るほどでした。

一方で、蹴球つまりサッカーは、日本人のほとんどが競技の存在すらよく知らなかったため、新校長の発表は、藤枝の人々を困惑させたのです。

錦織先生は、1905年（明治38年）筑波大学の前身にあたる東京高等師範学校<sup>こうとうしはん</sup>（以下東京高師）を出ておられました。

1896年（明治29年）には東京高師にフットボール部がつくられ、英国教師の赴任<sup>ふにん</sup>後は、学生たちに本場のサッカーを教えたり、外国人チームとの試合を行ったりもしていました。

錦織先生も在籍中、授業でサッカーをやったり、フットボール部の試合を観戦したりして、

蹴球というスポーツにかなり親しんだはずです。

錦織先生は、学生たちに勉強だけでなくサッカーも指導してもらおうと考え、卒業後に赴任した浜松の師範学校で、サッカー部の初代主将だった山口秀三郎氏を先生として藤枝に招きました。

錦織先生は新学校の理念として、「至誠一貫新興の意気を発揚すべし」つまり、「誠実さをつらぬき、新しいものに挑戦する気持ちをもちなさい」という言葉を掲げ、スポーツマンシップ、チームワークを重んじ、新しい競技に挑戦していきなさい、というメッセージを込めました。この理念は、今でも藤枝東高に大事な校訓として残っています。

1924年（大正13年）の志太中の『教員日誌』によると、入学式から1週間後の4月15日に学生たちは実際に練習をはじめています。「藤枝で初めてサッカーボールが蹴られた日」として、藤枝サッカーにとって、記念日ともいうべき重要な日となりました。

今からおよそ100年前の4月15日。それは、英国で近代サッカーを統括する初の組織であるフットボール・アソシエーション（FA）が設立されてから実に51年後のことでした。半世紀以上の時間をかけて、英国で誕生した近代サッカーという競技が、錦織兵三郎という人物を通じて、日本の東海地方の小さな町、藤枝へとたどりついたのです。

新任の校長先生が、周囲の反対を押し切って持ち込んだ蹴球（サッカー）という新しいスポーツ。このスポーツが、その後、藤枝の街にとって非常に重要な役割を果たしていくこととなります。では、藤枝がどうして蹴球都市を宣言するまでになるのか、一緒に見ていくことにしましょう。



志太中蹴球部 創設 志太中第1回生（昭和3年）



蹴上王者像：藤枝東高校





## 第2章

# 近代サッカーの誕生

100年前に藤枝に持ち込まれたサッカーというスポーツが、どのようにまちの人々に受け入れられ、愛されるようになったのか、その過程をたどる前に、サッカーがいつ、どこで今のような形に整備されていったのか、見ていくことにしましょう。

みなさんは、サッカーという競技がいつ、どこで誕生したか知っていますか？

その起源を、古代中国の蹴鞠（しゅくきく）に求める人もいます。蹴鞠は、「けまり」という名で日本にも伝わり、大化の改新で有名な中大兄皇子と中臣鎌足が、熱心な蹴鞠仲間だったという説もあります。

古代ローマにもハルパストゥムというサッカーよりも随分小さなボールを使って行う球技があったそうです。その他、メソアメリカの古代遺跡でも、ボールのような物体を扱っている人物の壁画が見つかっています。

ただし、今挙げたような競技は「サッカーの先祖である」と言うことはできたとしても、今、我々が目にしているサッカーとは、ルールもやり方も随分違います。では、サッカーという競技が今のような形になる、その原型が形づくられた時代と場所はどこだったのでしょうか。それは、1800年代のイギリスです。

1800年代のイギリスは、政治的にも、経済的にも、文化的にも非常に繁栄した国でした。国外にたくさんの植民地を持つようになり、最盛期には世界の6分の1以上が英国の傘下に入ったのです。

そんな豊かな国となったイギリスで、近代サッカーは誕生します。イギリスでは中世の時代から、モブ・フットボール（群衆フットボール）と呼ばれる球技が開催されていました。モブ・フットボールとは、お祭りの日などに、町の男衆が参加して、ひとつのボールを奪い合い、自分たちのゴールまで運ぶという競技でした。町や地域ごとにルールも参加人数もプレーする場所も違っていて、時には暴力沙汰も起こったため、王様や市長などから「危険すぎる」ということで禁止令が出たりもしたのです。

そんな中「パブリック・スクール」と呼ばれる主に中流、上流階級の子弟が通う私立中学校でモブ・フットボールの伝統が受け継がれていきました。

例えば、イートン校というスクールでは、「極力手を使わないフットボール」が定着し、ラグビー校では、「手を使ってもいいフットボール」が盛んにプレーされていました。

ところが困ったことが起きます。スクールを卒業し、大学などに進学した学生たちが、いざ集まってフットボールをやろうとしたところ、各校でルールが違いプレーできないこと

が分かったのです。誰もがひとつのルールや人数のもとプレーできる共通の約束が必要ということに気づいたのです。

1863年の冬、フットボールを愛する卒業生の代表者は、みんなでひとつの競技を楽しめる統一ルールを決め、そのルールの適応を推進し管理していく統括団体を設立するために集まりました。

ところが、議論は紛糾し、「手を使うフットボール」派と「なるべく使わない」派が歩み寄ることはなく、1863年には、イートン派だけで統一ルールとそれを統括する団体を作りました。それが現在のイングランド・サッカー協会である「フットボール・アソシエーション (FA)」です。

一方、「手を使う派」は、1971年にラグビー・ユニオンという統括団体を作り、ルールも統一しました。こうして、サッカーとラグビーは、正式に2つの競技へと“分化”していったわけです。

サッカー、ラグビーはまたたくまに世界中に広まりました。多くのイギリス人が国外に行き、各地に普及していったのです。

日本にサッカーが伝わったのはいつだったのでしょうか。1866年1月には横浜居留地にて外国人向けの横浜フットボールクラブ創立集会の存在が確認されています。

伝来後、しばらくは外国人のみによってプレーされていたフットボールですが、1873年（明治6年）に東京・築地にあった海軍兵学寮で、英国人中佐の手によって日本人兵学生たちの教育の一環としてフットボールが導入されました。

1878年（明治11年）には、東京・霞が関に体操伝習所が創設され、1886年（明治19年）、この体育伝習所が東京高等師範学校に吸収され、1896年（明治29年）、東京高師に「フットボール部」が誕生します。これが、日本の学校内にできた初めてのサッカー専門部となりました。

その東京高等師範に、その後、藤枝東高の前身にあたる志太中学校の初代校長となる錦織先生が入学されるのは、1903年のことです。



# 第3章

## ベルリンの奇跡



錦織先生が藤枝にサッカーを持ち込んでから12年後の1936年（昭和11年）。日本の、いや世界のスポーツファンをも驚かせる事件が起きます。同年の8月4日、ドイツの首都ベルリンで行なわれたオリンピックのサッカー競技（当時は男子サッカーしかありませんでした）において、日本の代表チームが、欧州の強豪、スウェーデン代表を3-2で破るという快挙を成し遂げたのです。人々は、この日本の勝利のことを「ベルリンの奇跡」と呼びました。

当時の日本代表は、初のオリンピック出場を成し遂げたとはいえ、世界的にはまだ弱小チームでした。メンバーのほとんどは大学生。対するスウェーデンは、世界一級の選手たちが集まった優勝候補であり、誰もがスウェーデンの圧勝を信じ、この試合を取材する日本のメディアの数もとても少なかったといえます。

その日本代表に、志太中（現藤枝東高校）出身の2人の選手が選出されていました。旧藤枝宿・長楽寺地区出身の笹野積次（ささの・せきじ 早稲田大学 志太中第4回生）と、焼津の東益津出身の松永行（まつなが・あきら 東京文理科大学=現筑波大学 志太中第5回生）の2人です。

地元では、笹野、松永両選手は当然ですが郷土の誇りであり、両選手がオリンピックに出場することになると、藤枝町体育協会が応援資金調達のための映画上映会を開催したり、盛大な壮行会や提灯行列が行われたそうです。



ベルリンオリンピック松永行、笹野積次 壮行会

信じられないことがあります。当時は飛行機での旅行がまだ一般化されておらず、2人を含むサッカー代表チームは全員、ユーラシア大陸を横断するシベリア鉄道などでドイツの首都ベルリンまで行ったのだそうです。到着したときにはみんなもうヘトヘトで、地元のチームとの練習試合ではほとんど勝てなかったといえます。

そんななか、強豪スウェーデンとの試合が始まりました。前半は大方の予想通り、実力に勝るスウェーデンが圧倒的に日本を攻め立て、0-2で折り返す展開になりました。しかし、後半になると、日本が反撃を開始します。ショートパスを中心とした戦術が機能し始め、後半4分、17分に得点をもぎ取り同点に追いつきます。そして試合終了まで残りわず

かとなった後半40分、左サイドを駆け抜けた松永選手がGKの脚の間を抜くゴールを決め逆転、そのまま敵の猛攻を耐え、3-2の勝利をつかみました。会場のヘルタープラッツ競技場に集まった6000人の観衆は、日本が追い上げをみせたころから、「ヤーパン! ヤーパン! (日本! 日本!)」の大合唱で日本チームを後押しし、日本が勝利した瞬間には、多くの人がピッチになだれ込んで、その偉業を讃えたと伝えられています。

この勝利のニュースは藤枝にももたらされましたが、今と違いテレビもインターネットも携帯電話もない時代ですので、報道のメインは新聞でした。それでも大変な盛り上がりを見せたといわれています。教え子の松永選手の逆転ゴールで日本が勝利したことを知った錦織先生は、新しい赴任先の浜松で「やった! やった!」と飛び上がって喜んだそうです。

日本の新聞のみならず、ヨーロッパ各国の新聞も「不可能なこと=奇跡が起こった!」と日本代表の偉業を大きく報じました。

「ベルリンの奇跡」は、その後の日本サッカーが世界で躍進していく第一歩になるはずでした。ところが、戦争がその道を阻んでしまいます。1941年（昭和16年）に始まった太平洋戦争では、日本代表選手も戦地に赴き、戦死する選手が出てしまうのです。スウェーデン戦で決勝ゴールを決めた松永選手も、南方ガダルカナル島に赴き、戦いの末、帰らぬ人となってしまいます。人材を多く失った日本サッカー界が、再び世界の舞台へ戻るには28年後、1964年の東京オリンピックまで待たねばなりませんでした。

郷土の誇りであった選手たちが世界で躍動した伝説の勝利ですが、同時に平和があってこそそのサッカー、スポーツだと感じさせられる偉業でもありました。



ベルリンオリンピック代表集合写真



ベルリンオリンピック参加章





## 第4章

# 2人目の“伝道者”

**1** 戦争が終わり、藤枝の街にも平和を謳歌する雰囲気が戻ってきました。1952年（昭和27年）、志太中学はいくつかの改名を経て、現在の校名である藤枝東高等学校となりました。その翌年、小宮山宏（こみやま・ひろし）先生などの指導が実って、サッカー部は、初の国民大会（以下国体）出場を果たしています。

1954年（昭和29年）、藤枝町は青島町ら近隣の5町村と合併し藤枝市となります。2年後の1956年（昭和31年）、サッカー部は、全国高校サッカー選手権（以下選手権）に初出場、兵庫県で行われた国体では準優勝の成績を残します。そして、翌1957年（昭和32年）、地元静岡県での国体で悲願の全国優勝を遂げるのです。なお、この国体でのサッカー少年部の会場は、藤枝東高のグラウンドでした。1回戦の福井農林高戦では、昭和天皇・皇后両陛下が試合を観戦（「天覧試合」と言います）。チームは、決勝で山陽高校を3-2で下し、地元藤枝の人々の前で、全国初優勝の栄冠を手にしたのでした。

錦織先生が蹴球を校技にしてから実に33年後、高校ナンバーワンの称号を手にした藤枝東高サッカー部でしたが、この後、錦織先生に続く「第2の伝道者」を迎えることとなります。それが東京出身の国語教師、長池実（ながいけ・みのる）先生です。

藤枝東高の前で当時から店を出していた森本商店（通称森パン）の森本陽子（もりもと・はるこ）さんは、長池先生の当時の印象をこんな風に語ります。

「藤枝宿から学校へと続く通りに立っていると、誰かが私にこう言いました。『あっちから来るのが、新任の国語の先生。サッカーのコーチもするらしい』と。ふと見ると、お洒落な白いジャケットに身を包んだ小柄な若者が歩いてきました。聞くと東京出身だといいます。『やっぱり、都会の人は恰好いいな』と思ったのを覚えていますよ」

長池先生は、1958年（昭和33年）から、サッカー部の指導に携わります。先生は、国語教師でしたが、サッカー部の指導と両立するために体育教官室に自分の机を持ってきました。非常に熱心なサッカー理論の探究者で、時には本場イギリスから専門誌を取り寄せ、辞書片手に読んで研究していたといいます。それまでの日本にはなかった新しい練習方法をサッカー部に取り入れることに積極的な指導者でした。小宮山先生によって強いチームの基礎ができていたサッカー部は、新しい“伝道者”の新しい指導法によって、さらに力強い集団へと変貌していったのです。

1963年（昭和38年）1月、サッカー部は、1956年から8回連続出場を続けていた選手権で悲願の初優勝を果たします。このときのメンバーには、その後、代表入りし東京オリン

ピック、メキシコ・オリンピックでプレーする山口芳忠（やまぐち・よしただ 第36回生）、代表で活躍する桑原勝義（くわはら・かつよし 第36回生）、菊川凱夫（きくがわ・よしお 第37回生）などが在籍していました。東高サッカー部は、翌1964年（昭和39年）1月の選手権でも優勝し、全国連覇を果たすのです。

藤枝のまちは、サッカー部の活躍に大いに沸きました。当時はまだ部活動のために別の地域から選手を集めてくるなどという時代ではありません。メンバーのほとんどが藤枝市か近隣地域の出身者だったのです。人々は、地元の学生たちの全国での奮闘を心から喜び、暖かい声援を送りました。

今と違って限られた娯楽しかなかった時代です。人々は休みになると藤枝のまちに4つあった映画館に行き、映画を観るか、東高のグラウンドで行われるサッカー部のゲームを観に行くかして過ごしました。森本さんは言います。「当時は本当にたくさんの人が東高のグラウンドにやってきました。コンクリート作りのスタンドはすぐに満員になり、逆側の松林のほうまでファンが溢れたんです。松林で声援を送る父兄やファンたちのことを、人々は“松林組”などと呼んでいました。当時は、グラウンドでの歓声が店の中まで聞こえてきました。それほどの熱狂ぶりだったのです」

選手権、初優勝メンバーでFWとしてプレーしていた安藤洋志（あんどう・ようじ 第36回生）さんは、優勝し車で戻って来た後の藤枝駅の様子をこう語ります。「ひとつまえの島田駅で学生服から藤色のユニフォームに着替えさせられ、藤枝駅に着くと、駅前にみたこともないほど大勢の人が僕らを待ち構えていました。みんな『よくやった!』、『おめでとう!』と声をかけてくれました。嬉しかったのはもちろんですが、内心『藤枝のまちに、こんなに人がいただか』と驚きのほうが大きかったですね」

新伝道者、長池実とともに、選手権での連続優勝を果たした藤枝東高サッカー部。“藤色旋風”などと言われた躍進でしたが、それは単なる序章にすぎませんでした。長池先生とその教え子たちが作り出す旋風は、その後さらに勢いを増していくのです。



第41回全国高校サッカー選手権大会  
藤枝東高初優勝



第41回全国高校サッカー選手権大会優勝パレード



長池先生の口癖は、「東高だけが強くなっても意味がない。この地域全体、静岡県全体の学生サッカーのレベルが向上しないといけない。小学生や中学生の強化も重要だ」という趣旨のものだったそうです。

1965年（昭和40年）、10年連続で選手権に出場していた東高サッカー部が連続出場を阻まれる事件が起きます。県大会の準決勝で、東高サッカー部に土をつけたのは、同じ市内の藤枝北高サッカー部でした。藤枝の学生サッカーは、この2校がお互いよきライバルとなって競い合い、育っていったのです。長池先生は、口癖どおり、ライバルチームの勝利を素直に認め、選手権の前には、北高のグラウンドに赴き、選手たちにアドバイスを送ったと言われています。

翌1966年（昭和41年）度、新伝道者、長池実は、高校サッカー史上、最強のチームを生むこととなります。昭和35年頃から現在ではインターハイ（全国高校総合体育大会）と呼ばれる大会が夏場に行われるようになりますが、男子サッカーは昭和41年、青森での大会から加わることとなりました。初めてのインターハイに東高サッカー部も出場し、北高に敗れた悔しさ晴らすように、無失点で優勝を飾りました。東高サッカー部の快進撃は止まらず、秋に大分県で開催された国体、さらに冬の選手権にも優勝し、高校世代のタイトルを総なめにし戦後初の三冠に輝きました。練習試合を含めても一度も負けたことのない「77戦無敗」という成績を残しましたが、選手権での秋田商業と決勝戦で圧倒的に攻めながらも0-0で引き分け、両校優勝となったために、試合後には負けたようにガッカリしている選手もいたそうです。それほど、あの年度の藤枝東は強いチームでした。高校三冠を成し遂げたこのときのチームからは、その後大学、実業団で大活躍する選手が育ち、松永章（まつなが・あきら 第40回生）、井澤千秋（いざわ・ちあき 第40回生）の2人は日本代表の一員としてもプレーしました。

長池先生率いるサッカー部は、1971年（昭和46年）1月の選手権でも全国制覇。先生は、結局、1977年（昭和52年）までサッカー部の指揮を執り、高校総体、国体、選手権の3大会で通算7回、チームを全国制覇へと導きました。

強いチームをつくりあげた長池先生の教えを請おうと、県内だけでなく全国から多くの高校サッカーの指導者が藤枝を訪れました。強い藤色に憧れて、ユニフォームを紫にするサッカー部が多く出るなど、東高サッカー部の名声は全国に轟きました。

冒頭の言葉の通り、長池先生は、「ともに強くなりたい」という思いを持った人でした。全国の強豪高校を藤枝に招待し、全国高校サッカー・フェスティバルを創始したのもそうした先生の信念からきています。また、先生はアジア地区で初めて開催されたFIFA主催のコーチング・スクールに参加し、自らの指導にさらに磨きをかけることも忘れませんでした。そこで学んだ知識や経験を東高サッカー部に持ち帰り実践するだけでなく、地元志太地域の小学生や中学生の指導者を対象としたサッカー教室を開催するなど、人材育成・指導者育成にも多大な貢献を果たすのです。

錦織先生が植えた「蹴球」という名の種は、長池実というもう一人の伝道者によって、たくさんの藤色の花を咲かせました。野球や相撲の絶大な人気に押され、日本にはまだサッカーのプロリーグすらなかった時代。日本代表がワールドカップに初出場する1998年から約30年も前のその時代に、藤枝のまちでは、サッカーへの情熱が花を咲かせていました。

長池先生の著書にはこんな言葉もあります。「勝つことだけでは十分ではない。自分自身も観衆も満足する魅力あるプレイが必要なのである」。結果だけではなく、魅力あるプレイをして、観ている人々にも喜んでもらう。そして、周囲とともに強くなる。藤枝のまちは、長池先生が伝えたサッカーに夢中になり、錦織先生が植えた種を、長池先生とともに育てていきました。もしかすると、藤枝が本当の意味で「蹴都」として歩みはじめたのは、先生が東高サッカー部を率いていた時代、1960年代から70年代にかけてのことだったかもしれません。



長池先生



子供達を指導する長池先生



昭和41年度 史上初の高校サッカー三冠  
(総体、国体、選手権)を達成した藤枝東高



## 第5章

# メキシコシティオリンピック 銅メダル

1936年（昭和11年）に行われたベルリンオリンピックサッカー競技で、優勝候補スウェーデンを破る「ベルリンの奇跡」を起こした日本でしたが、その後再び低迷期に入っていました。その状況を打開すべく、当時の日本サッカー協会は大きな決断をします。外国人コーチを招聘することにしたのです。1964年（昭和39年）に行われる東京オリンピックへの強化のため、1960年（昭和35年）にドイツ人コーチが来日します。後に「日本サッカーの父」といわれるデットマール・クラマーです。

クラマーは、当時の日本代表選手に、インステップキックやヘディングなど、基本中の基本から指導したといいます。また積極的に日本文化に触れ、食事や入浴も選手とともにやり、日本サッカーへの理解を深めていったそうです。

海外のプロコーチに指導された日本代表は、その力を徐々につけていきます。そして迎えた東京オリンピックでは、静岡県から3人が日本代表に選出されました。清水東高出身で現在は藤枝市在住の杉山隆一（すぎやま・りゅういち）、藤枝東高を卒業し八幡製鉄に所属していた富沢清司（とみざわ・せいじ）、同じく藤枝東高出身で中央大学2年生の山口芳忠（やまぐち・よしただ）です。この大会、クラマーの指導を受けた選手たちは大いに躍動し、アルゼンチンを逆転で破るなどベスト8の成績を残しました。日本代表の活躍により全国に空前のサッカーブームが巻き起こりました。



東京オリンピック代表 富沢、山口

日本サッカーを復活させ、任期を終えたクラマーは、日本サッカーリーグの創設などいくつかの提言を残していきました。そして帰国の際クラマーは「試合終了のホイッスルは、次の試合開始のホイッスルである。」という有名な言葉を残しています。これは次のメキシコオリンピック、そしてその後の日本サッカー躍進へのエールでした。

東京オリンピック後、クラマーの教えを受けた選手を中心に再結成された日本代表は、1968年（昭和43年）のメキシコオリンピックへ向け活動を再開させました。東京オリンピックでも活躍した藤枝ゆかりの3選手も改めて日本代表に名を連ね、海外チームとの試合など本大会に向けて準備を進めていき、いよいよメキシコオリンピックが開幕します。

この大会で日本は世界の強豪を相手に躍動し、初戦のナイジェリア戦に勝利すると、勢いに乗じブラジル、スペインと引き分けグループリーグを突破、更に準々決勝ではフランスに競り勝ちベスト4へ進出します。ここまでの試合、郷土選手の杉山は、エースストライカー釜本とのコンビで攻撃し、守っては山口が「スッポン」の異名どおり粘り強い守備を見せました。



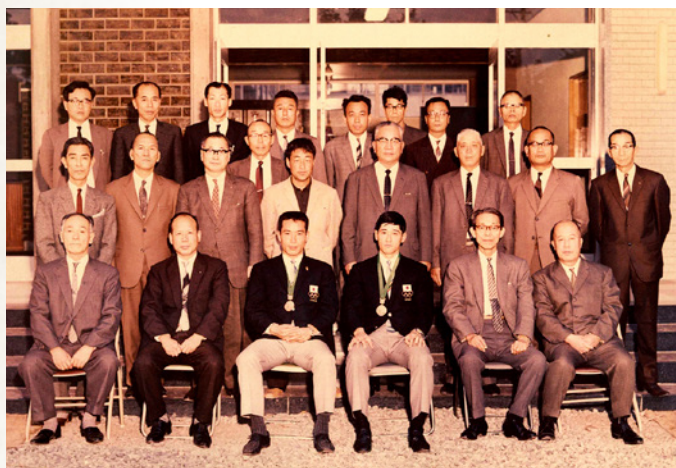
メキシコオリンピックのトリオ  
(左から山口・富沢・杉山)静岡新聞昭和43年1月5日

準決勝の相手は、当時世界最強と言われたハンガリーでした。快進撃<sup>かいしんげき</sup>を見せてきた日本代表でしたが、この試合は世界との力の差を見せつけられ0-5の敗戦となりました。日本代表は銅メダルをかけた3位決定戦に臨む<sup>のぞ</sup>こととなります。

3位決定戦の相手は、ホスト国のメキシコ。10万人収容のアステカスタジアムはメキシコサポーターで一杯になり、まさにアウェイゲームという厳しい条件での試合でした。しかし日本代表は臆することなく戦い、杉山、釜本のコンビで2-0とリードを奪います。後半メキシコにPKを与えピンチを迎えますが、これを阻止しそのまま2-0での勝利となりました。

日本代表の銅メダル獲得は、日本サッカー界においても、また世界のサッカーシーンでも驚きを与えました。更にこの大会で日本はフェアプレー賞<sup>かくとく</sup>を獲得します。この試合をスタンドで応援していたかつてのコーチ、クラマーは「これがスポーツマンの至高<sup>しこう</sup>の姿だ。」とメディアに向けて言ったといひます。

杉山、富沢、山口らこの時の日本代表のメンバー達が、その後の日本サッカーをけん引し、1993年（平成5年）のJリーグ開幕時には監督など指導的立場に立っていました。まさにクラマーの教えが、現代の日本サッカーに生き続けているといっても過言<sup>かごん</sup>ではありません。



メキシコオリンピック



メキシコオリンピック  
(旬刊静岡10月号)



## 第6章

# フランスワールドカップ

1993年（平成5年）、Jリーグが開幕しプロのサッカー選手が活躍し始めたことで、ワールドカップに向ける人々の目も変わってきました。以前の日本人にとってワールドカップは見るもので、出場するものという感覚ではありませんでしたが、ヨーロッパや南米のように日本もプロ選手が挑戦できる環境が整ったことで、ワールドカップ出場は夢から現実的なものに変化していきました。サッカー日本代表が初めてこの夢の舞台の切符を手にしたのは1998年（平成10年）のフランス大会でした。そしてそのチームに藤枝から選ばれたのが、中山雅史（なかやま・まさし）と名波浩（ななみ・ひろし）でした。

中山は1967年（昭和42年）生まれ、現在の藤枝市岡部町にて小学4年生からサッカースポーツ少年団に加入しました。中学時代には東海選抜として全国優勝に貢献し、藤枝東高校に進学してからは、全国選手権大会でベスト4まで勝ち上がりました。

その後は筑波大学に進学、そして大学卒業後にヤマハ発動機へ入社し、Jリーグ昇格後はジュビロ磐田のエースストライカーとしてJリーグMVPや得点王、ベストイレブンなどの功績を残しました。

名波は1972年（昭和47年）生まれ、兄の影響でサッカーを始め、小学1年生から地元西益津



第63回全国高校サッカー選手権



第63回全国高校サッカー選手権に出場の中山  
（2列目右から2番目）



名波浩（小学生時代 前列左から3番目）

小のサッカースポーツ少年団に入団しました。高校は清水商業高校に進学し、清水での成功を胸に努力を重ねました。順天堂大学卒業後はジュビロ磐田に加入し、その後イタリアセリエAのヴェネツィアなど、海外サッカーにも挑戦しました。

2人が日本代表に選出された際、ジュビロ磐田のチームメイトとして当時黄金時代を築いていました。中山選手は9番を背負い攻撃の要<sup>かなめ</sup>であるフォワードとして、名波選手はエースナンバー 10を背負い司令塔として出場。中山選手がワールドカップという大舞台で日本人初ゴールを決めるなど大いに活躍しました。

その後、名波はフランス大会出場の功績から、第1号となる藤枝市スポーツ栄<sup>えい</sup>誉<sup>よ</sup>顕<sup>けん</sup>彰<sup>しょう</sup>を受賞されました。（中山は旧岡部町出身のため、当時は該当せず。）藤枝の2人の選手が国の代表としてワールドカップという舞台で世界と戦い、藤枝の、そして日本の人々に夢と希望を与えた瞬間でありました。



平成10年7月25日  
藤枝市スポーツ栄誉顕彰を受賞する名波浩



中山雅史



# 第7章

## 長谷部誠物語



1984年（昭和59年）、静岡県藤枝市に生まれた長谷部誠（はせべ・まこと）は、3歳から地元のクラブチームでサッカーを始めました。小学校は青島東小学校へ入学し、地元のサッカースポーツ少年団でチームメイトとともに<sup>きび</sup>厳しい練習を乗り越え、サッカーの基礎を作りました。

中学校も地元の青島中へ入学しましたが、ここで長谷部少年は最初の大きな決断をします。それは中学の部活動に入部するか、クラブチームに入団するか。最終的に部活動を選択し、人生の道しるべをしてくれた滝本義三郎（たきもと・ぎさぶろう）先生や良き仲間と出会い、サッカーの楽しさを学んだのです。

高校は、サッカー強豪校として名高い藤枝東高校への進学を決めています。同校には県内だけではなく、県外からも有力選手たちが集まってくるため、1年生の最初の頃は、とても試合に出られるようなところではない、と感じていたそうです。しかし、幼い頃から抱いてきた「藤色のユニフォームを着て試合に出る」という思いを胸に努力を続け、高校2年生の終わりからAチームとして試合へ出場するようになりました。2001年（平成13年）には、全国高校総合体育大会準優勝、そして静岡県代表の一員として宮城国体に出場し、優勝をおさめています。

高校卒業を前に、長谷部は人生で2回目の大きな決断である、プロへの道を選択します。浦和レッズへの入団は、本当にたくさんの経験をする事ができたと言っています。プロ1年目にはほとんど試合に出ることができませんでした。あきらめずに懸命にトレーニングを重ね、2年目からはコンスタントに試合にでられるようになり、2004年（平成16年）にはJリーグベストイレブンにも輝きました。そして2年後にはチームの司令塔として、同じ藤枝出身で浦和レッズに所属していた山田暢久（やまだ・のぶひさ）とともに日本一の栄冠<sup>えいかん</sup>を獲得しました。

長谷部選手が初めてサッカー日本代表に選出されたのは2006年（平成18年）、当時22歳でした。少年時代から変わらず持ち続けていた「負けず嫌い」と「常に上手になりたい」



小学校時代



中学時代



高校時代



という気持ちの下、2010年（平成22年）にはFIFA2010ワールドカップ南アフリカ大会にゲームキャプテンとして出場し、ベスト16に進出、その後2014年（平成26年）FIFAワールドカップブラジル大会と2018年（平成30年）のロシアワールドカップにも選出され、キャプテンとしてチームをけん引していきました。このロシア大会で16強敗退後、長谷部選手は代表引退を発表しましたが、キャプテンとして出場した試合数は日本代表で歴代1位とされています。



南アフリカワールドカップ出場壮行会

海外チームでは、2008年（平成20年）にドイツ1部リーグのヴォルフスブルクに移籍し、翌シーズンにはブンデスリーガ優勝に大きく貢献しました。その後、同リーグの1.FCニュルンベルクを経て、2014年（平成26年）にアイントラハト・フランクフルトに移籍し、在籍10シーズンを迎えます。40歳となった長谷部選手は、外国籍選手としてクラブ歴代出場記録を打ち立てています。

自身の選手生活だけでなく、次世代サッカーを担う子どもの育成のため、「長谷部誠サッカースクール」や「アイントラハト・フランクフルト・アカデミージャパン」の開設も行っている長谷部選手。2024年、長い選手人生に幕を下ろしますが、今までも、そしてこれからも、藤枝の子どもたちに「夢に向かって本気になれ！！」と熱いエールを送ってくれています。



スポーツ栄誉顕彰受賞



市民栄誉賞



## 第 8 章

# 女子サッカー<sup>ほう が</sup>萌芽、藤枝MY F C誕生からJの舞台へ

藤枝における女子サッカーの歴史は、1978年（昭和53年）に結成された藤枝姉妹 F Cから始まりました。婦人体操教室で指導していた中村玲子（なかむら・れいこ）が、主婦たちの足腰の弱さをサッカーで改善しようと、教室生である主婦たちに声をかけ、集まったメンバーで活動をスタートさせました。その後中学生などの若い選手が増え、1994年（平成6年）には選手13人が分かれて藤枝 F C ママを発足しました。



藤枝姉妹 F C

1988年（昭和63年）には稲葉少年団で指導していた岸茂樹（きし・しげき）が、少年団に女子選手が加入してきたのを機に、稲葉・広幡・葉梨の女子選手による藤枝FC女子を創設しました。藤枝 F C 女子に所属する選手が中学生になると、藤枝 F C ママでプレーするようになり、1996年（平成8年）には藤枝 F C ママと藤枝 F C 女子が1つのクラブチームとして、ママの部を藤枝 F C エスペレ、中高生の部を藤枝 F C アミーガ、小学生の部を藤枝 F C バンビーズの3つに分け、活動するようになりました。



県下初の女子サッカー部誕生 静岡新聞

1989年（平成元年）には高洲中学校に県内初の女子サッカー部が誕生し、初代監督として石上瞬二（いしがみ・しゅんじ）先生が25人の部員を指導しました。その後、市内の中学校に女子サッカー部が創部されることはありませんでしたが、高洲中学では現在も活動を続けています。

高校女子サッカーは、藤枝西高校が<sup>きょうがく</sup>共学化する前の1993年（平成5年）、同好会として発足し、後に部活動としてスタートしました。成長ぶりはめざましく平成8年度県女子新人大会での準優勝を皮切りに、2年後の全日本高校女子選手権東海大会で初優勝を<sup>かざ</sup>飾りました。その後県高校総体では11年度の初優勝から4連覇、全日本高校女



藤枝西高女子サッカー部選手権3位



子選手権東海大会では12年度まで3連覇、13年度は準優勝、14年度は優勝するなどの功績を残しました。

また、藤枝順心高校では、藤枝南女子高校時代の1994年（平成6年）にサッカー部が創設されました。全国大会の常連校になったのは、学校名が藤枝順心高校に変わった平成15年度大会からで、同年、有望選手10人が入部すると県高校総体で4位となり、全日本高校女子選手権東海大会に出場しました。翌年には県高校総体、全日本高校女子選手権東海大会で初優勝を飾り、以降、2023年（令和5年）まで全国高校総体で優勝・準優勝を2回ずつ、全日本高校女子選手権大会で史上最多の優勝7回、準優勝1回の好成績を収めています。

なでしこジャパンとの繋がりは2008年（平成20年）が始まりです。同年2月になでしこジャパンが藤枝総合運動公園サッカー場を練習会場としたのを始めに、翌年にはなでしこジャパンとU19日本女子代表が藤枝総合運動公園サッカー場でトレーニングを行いました。2010年（平成22年）には皇后杯全日本女子選手権大会が初めて同サッカー場で開催され、藤枝順心高校がなでしこチャレンジリーグ所属のAC長野パルセイロレディースに競り勝ち地元での勝利を記録しました。

また、2011年（平成23年）には本市出身でJFAアカデミー福島に所属する川島はるな（かわしま・はるな）選手が大会に出場し、故郷藤枝にその雄姿を披露するなど藤枝ゆかりの選手も多数出場しました。以降、藤枝総合運動公園サッカー場は皇后杯全日本女子選手権大会の会場として、第42回大会を除き使用されています。

2009年（平成21年）になると市内初Jリーグチームとなる藤枝MYFCが始動し始めます。初代小山淳（こやま・じゅん）社長が「サッカーのまちからアジアのサッカーシティへ」を合言葉に(株)藤枝MYFCを立ち上げ、静岡県リーグ1部の藤枝ネルソンを母体に活動を開始しました。

2010年（平成22年）には、東海リーグに所属していた静岡FCと統合、東海リーグ1部で優勝し、全国地域リーグ決勝大会



藤枝順心高校 2023選手権決勝



藤枝MYFC JFL 昇格



に進出しますが敗退を期しました。しかし翌年には全国地域リーグ決勝大会を勝ち抜き、JFLへ昇格、2014年（平成26年）にJ3リーグに参戦することが決まりました。そして記憶に新しい2022年（令和4年）、須藤大輔（すどう・だいすけ）監督による超攻撃的サッカーが功を奏し18チーム中2位でJ2リーグに昇格しました。

J2リーグへの昇格やチームの活躍は、藤枝に元気を与え、平均観客数の大幅増加に起因しました。また、J2昇格による全国への市のプロモーションも効果的であり、アウェーサポーターの来訪が地域経済の活性化に繋がっています。

女子サッカーや藤枝MYFCの活躍は、藤枝のサッカーに新たな文化を生み出し、現在サッカーの振興に大きく貢献したのです。



藤枝MYFC J2昇格



藤枝MYFC J2 2023シーズン





## 第9章 未来の藤枝サッカー



藤枝市におけるサッカーはこれまで大変長い歴史があり、市民の中では文化となるほど深く根付いています。私たち市民は、この素晴らしいスポーツによって人づくり、地域づくり、まちづくりに対する恩恵を知らず知らずのうちに受けてきました。

サッカーとは見ていてもやっても楽しい。また試合では負けたくない、絶対に勝ちたい。僕はこのチームが好き、私はこのチームを応援している、などと思っている人が大勢います。サッカーというスポーツを通じて各個人が体験する様々な楽しさ、喜び、感動があるからそう思えるのであり、そのために自分で練習を頑張ったり、地元チームを一生懸命応援したりします。それは、地域の住民にとっては自分が暮らすまちへの誇りや愛着、プレーヤーにとっては自分自身の成長を促すことになります。

サッカーにはこのような人の成長や地域におけるつながりを自然と育ててくれる力があるのです。サッカーにはこういった良い点がたくさんあることを理解して、すべての市民が優しく心身ともに健康になるため、またサッカーにより地域が活性化するために、市内の様々な資源（人、観光、文化、歴史など）と融合したサッカーを核としたまちづくりをさらに進めることが重要です。

今後の目指すべき方向として、まちづくりだけでなく、本市におけるサッカー自体の盛り上がり非常に大切です。そのためには今までのサッカー人気を支えてきた小中高生年代が強くなること、また本市の象徴クラブで唯一のプロチームである藤枝MYFCの躍動が欠かせません。

本市内の小中高生から優秀な選手を輩出し、カ



澤穂希氏、阪口夢穂氏を招いての  
JFAマジカルフィールド



田嶋会長から贈呈されたサッカーのまち  
100周年記念日本代表ユニフォーム



サッカーのまち100周年記念式典



テゴリーごとの全国大会で勝ち上がり、地元出身選手として藤枝MYFCで活躍することができれば市内でも大きな関心と呼び、盛り上がります。

また、近い将来、世界的な選手を育成し、最終的にはバロンドール選手を輩出することは藤枝にとって大きな夢でもあります。そのためには、プレーする子どもたちだけでなく、周りでサポートする指導者・コーチ・保護者など大人の存在が重要になってきます。

プレーヤーも大人も、将来の大きな目標に向かって、努力できる環境を整えることが私たちのミッションです。小中学生の皆さん、ぜひこの藤枝の地で自分の夢に向かって邁進<sup>まいしん</sup>してください！



藤枝MYFC



キッズサッカー



女子キッズサッカー

